



中国地方の最高峰「大山」は、「出雲国風土記」の国引き神話では弓ヶ浜半島を綱に、それを結ぶ杭にして島根半島を引き寄せたと登場しています。また、古くから修験者の修業の場として知られ、大山寺と大神山神社を抱える信仰のメッカでもありました。四季を通じて大山は多くの登山者を魅了させますが、熱雲堆積物や火砕流などからできている大山はもろく崩れやすい山でもあり、その土砂は濁流と共に下流を襲い、大きな災害をもたらしています。

大山山系の砂防工事は、昭和7（1932）年に天神川流域の本川筋を含む7つの溪流で鳥取県によって開始されましたが、その2年後の9月室戸台風は流域のいたるところで大崩壊を発生させ、下流平野部に多大の損害を与えました。このため、天神川改修工事が国によって計画され、昭和11年に天神川水系の小鴨川筋において直轄砂防が開始されました。これが世界の共通語となった「SABO」の始まりです。以来80年、大山の砂防事業は社会の変化に対応しながら人々の暮らしを守るために今もなお続けられています。

室戸台風時、天神川の支川小鴨川上流域は、大山火山噴出岩類という脆弱な地質で形成されているうえに、急勾配という地形も加わり流出した岩や砂礫によって、中流部より下流は埋め尽くされました。人々が伯耆富士として崇める霊峰大山がもつ別の顔、牙をむき出した自然を知らされたといえます。

現在、天神川の二次支川清水川の上流域には溪床の洗掘や溪岸の浸食を防止し、流出土砂を発生させないための堰堤群が並んでいます。これらは昭和11年から14年3月までに建設された5基と同19年に建設された6号で、谷積みを中心とした重力式練積堰堤で、水通しの天端一層分を布積みとするのが特徴で、砂・砂利は現地で採取、コンクリートは手練りというそのほとんどを人力で行ったものです。今は原形を留めていない4号を除き5基が国の登録有形文化財に指定されています。

■位置図



砂防堰堤工事状況

ほとんどが人力による清水川第2号堰堤工事の様子（昭和12年頃）。「大山砂防（倉吉工事事務所）」より転載



清水川第5号砂防堰堤完成（昭和14年頃）

堤長63.0m、堤高4.0mで、水通しの角部を1割法で築き、堤体前面には練積の副堰堤が設けられている。堰堤群では最上流部に位置している。「大山砂防（倉吉工事事務所）」より転載



清水川第5号砂防堰堤

戦前に建造された砂防堰堤は、歴史的価値を有する土木構造物として国の有形文化財に登録された。清水川砂防堰堤のなかで最上流に位置する。